

人知れず悩みを抱えるヤングケアラー 医療現場で気付いた時は声掛けを

大阪歯科大学医療保健学部教授
濱島 淑恵

祖母が通院する時、母親と一緒に付き添う小学生がいました。はたから見れば、優しい孫が祖母の手を取り、会話を交わす、微笑ましい光景だったことでしょう。本人も病院の看護師や医師に「偉いね」と褒められることが何よりうれしく感じていました。しかし、家では、妄想や徘徊等の症状がある認知症の祖母を見守り、話し相手をし、夜間徘徊に付き添い、家事を担う等、多くの時間がケアに費やされ、学校には行けませんでした。

ある高校生は精神疾患の母親の通院に付き添っていました。家では家事、年下のきょうだいの世話をし、不安の強い母親の話し相手をしていました。医療職からは「キーパーソン」と見なされ、薬の注意事項や伝達事項等、重い責任を負わされました。常に「ケアラー」としての役割を期待され、気の休まる時はありませんでした。数年後、原因不明の体調不良に襲われ、高校退学を余儀なくされました。

患者さんに付き添う優しい家族は、もしかするとヤングケアラーで、人知れず悩みを抱え込んでいるかもしれないのです。

日本にはヤングケアラーの正式な定義はありませんが、日本ケアラー連盟は「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子ども」としています。18歳以上は「若者ケアラー」と呼ぶことが多いです。

近年、国や地方自治体の調査では、小学校から大学におけるヤングケアラーは約4～6%、クラスに2人程度はいるとされ、決して珍しい存在ではないことが示されています。ケアによる影響として遅刻、欠席が多い、友人関係がうまくいかない、相談できる人がいない等が挙げられています。また、身体的、精神的健康の悪化を指摘する研究も見られます。進学や就職を諦めるケースも少なくありません。単なる「手伝いをするいい子」として捉えるのではなく、社会として取り組む必要がある事柄といえるでしょう。

医療現場で、ヤングケアラー、若者ケアラーの存在に気付いたら、健康状態、負担を気遣い、様子を聞いてほしいと思います。それだけで孤独から救われます。現在、行政による相談窓口の設置も増えてきているので、具体的な支援はそこにつないでください。外来患者だけでなく、入院患者が退院する際、退院後のケアに子ども・若者が関わることはないか確認することも有効でしょう。

いつもと少し視点を変えて、患者の家族を見つめ直し、ちょっと声を掛けてみてください。



はましま よしえ

1993年、日本女子大学人間社会学部社会福祉学科卒業、99年、同大学院人間社会研究科博士課程後期満期退学。2017年、金沢大学で博士(学術)を取得。専門は高齢社会における介護、家族、ワークライフバランスなど。2019年にヤングケアラーの集い「ふうせんの会」を有志とともに立ち上げた。2021年度の神戸市子ども・若者ケアラー支援アドバイザー、大阪市ヤングケアラーPTメンバーを務めている。著書に『子ども介護者——ヤングケアラーの現実と社会の壁』(角川新書)など。